

大学女子サッカー選手のライフスキルと競技力の関連性

科学コミュニケーションゼミナール 1316008 植田 悠莉子

1. 研究動機・研究目的

サッカーのような集団スポーツ競技では、チームを構成するメンバー個々の競技レベルが高いほど、成功を収めることができると考えられており、個人の競技能力とチームパフォーマンスは深く関係していることが明らかになっている。しかし、時にはチームを構成するメンバーの競技レベルが相手よりも劣っていたとしても、チームとして「チームワークが高い」と感じるチームが試合に勝利する、という場面がみられる。このような結果が生じることから、チームワークの重要性を推し量ることができる。

近年のサッカー選手の育成においては、サッカーの競技場面のみならず日常生活の中で直面する様々な問題や課題を一つひとつ克服し、人間として成長し自立していくこと及びアイデンティティを確立していくことの重要性が指摘されている。この力をライフスキルと呼び、ライフスキル育成のためのプログラムを実施しているクラブチームや組織も多い。スポーツとライフスキルの関連性については、さまざまな競技や年代を対象に研究されている。しかし、大学女子サッカー選手を対象とした研究は未だ十分に展開されていない。従って、大学女子サッカー選手における競技力などの属性とライフスキルの関連性を明らかにすることによって、大学女子サッカーの発展や競技力向上へと貢献できる可能性がある。

そこで本研究は、大学女子サッカー選手のライフスキルがどれほどチームや個人の競技力に影響を与えているかを明らかにし、大学女子サッカーの競技力向上へと貢献することを目的とする。

2. 研究方法

本研究の対象者は、大学女子サッカー選手 121 名（1 年生 35 名、2 年生 27 名、3 年生 29 名、4 年生 30 名）とした。全ての対象者は、以下の関東大学女子サッカー連盟運営要項の条件を満たす大学に所属する女子サッカー部員とする：①日本サッカー協会に「女子」の種別で登録されたチームであること、②関東サッカー協会地域に所在するチームであること、③全日本大学女子サッカー連盟に加盟した大学チームであること。連盟所属の 33 大学は 1、2、3 部の 3 つのリーグに分かれてリーグ戦を行っており今回は、関東大学女子サッカーリーグ 1 部リーグと 2 部リーグに所属する大学を対象とした。

質問票は、ライフスキル測定尺度として「日常生活スキル尺度（大学生版）」を使用し、競技力の測定は部内での競技力（レギュラー、準レギュラー、レギュラーでない）、競技継続年数、最高成績（国際大会、全国大会、地方大会、都道府県大会）、の 3 項目とした。また、個人の属性を測るため 11 項目からフェイスシートを構成した。

3. 主な結果と考察

競技力におけるライフスキル得点の比較を行い

レギュラー、準レギュラー、非レギュラーによるライフスキル得点の比較は「リーダーシ

ップ」「感受性」「自尊心」の3項目に有意差が認められた。競技力が高ければ高いほど「リーダーシップ」と「自尊心」の得点が高かった。しかし、「感受性」のみ、「非レギュラー」の方が最も高い得点という結果だった。これは、チームを代表して試合に出場するという責任感や、普段練習では味わえない試合ならではの成功体験から自分自身に自信がついた結果であると考えられる。自信がつくことによって周りの人を引っ張っていく行動力につながり、この2つの因子の得点が高くなったことに関連している。また、「感受性」についての結果からは、高い競技力になると他人より自分自身に意識がむいてしまうのではないかと考えられる。

競技継続年数によるライフスキル得点の有意差は「情報要約力」のみみられた。サッカーはチームスポーツであり、コミュニケーションが必要となってくる。レベルが上になるにつれて、プレー中にいかに端的でわかりやすく伝えるかが重要となってくる。その結果、競技経験が長いとそうしたプレー中のコミュニケーションをとることが必然的に多くなってくる。よって、「情報要約力」の得点が競技力は上がるにつれて高くなったと考えられる。

過去の最高成績によるライフスキル得点の比較では、どの因子にも有意差がみられなかった。この結果については調査方法が悪かった可能性と、実際に試合経験の差がライフスキルに関連していない可能性も示唆された。

4. 結論

大学女子サッカー選手のライフスキルと個人の競技力には少なからず関連性があることが明らかになった。特に「リーダーシップ」「自尊心」「情報要約力」のライフスキルを高めることによって、個人の競技力が高くなる可能性が示唆された。

5. 卒業論文の執筆を終えて

今回の研究での課題は、調査方法にあると考えられる。調査対象者に対して一時点の調査しか行うことができず、過去の行動など対象者の思い起こしに頼って回答してもらう形になり思い出しバイアスがかかってしまったことが課題としてあげられる。また、対象者を関東大学女子サッカー1、2部リーグ所属大学の部員としたが、細かな個人属性を補正できなかったことも課題の1つとしてあげられる。それらの問題の改善策として、思い出しバイアスの軽減法は、対象者が最初にある出来事を評価した時点から、しばらく時間をおいて同じ出来事を評価してもらう方法がある。個人属性の補正については、例えば役職経験は現在のチームのみならず、これまでの中で経験したものを答えてもらう形にすることがあげられる。現場へは、本研究でライフスキルと個人の競技力の関連性は明らかになったことをエビデンスとして、チームでの取り組みの中にライフスキルを高められるプログラムを提案するなどして貢献していけるのであろう。また、今後は個人ではなくチームの競技力が個人のライフスキルやチーム全体のライフスキルに関連するのか、様々な視点からより詳しく追及することでより大学女子サッカーの競技力向上により貢献していけると言える。

また、本研究に協力していただいたすべてのみなさまに感謝の意を表します。